



「第二次日本経穴委員会」便り

～第20回 江戸時代の経穴書～

第二次日本経穴委員会作業部会委員 かとりとしみつ 香取俊光

本誌が読者の皆様に届いたときには、3月13日～15日に東京大学で開催される第6回国際経穴部位標準化非公式会議は終了していることと思います。早くこの会議の報告をしたいのですが、執筆上の都合で残念ながら間に合いません。昨年9月の大阪会議で討議し残した16穴も最終合意されていることでしょうか。これまで、何回話し合っても合意できなかった経穴ですので、どんなドラマがあるのでしょうか。

10月下旬か11月上旬につくばで開催されるWHO国際経穴部位標準化公式会議までの日程も詰まっております、全員が集まって討議する機会こそ少なくなっていますが、その分、メーリングリストでの情報交換は、徐々に緊迫の度を深めています。

しかし、公開可能でかつ読者の興味を引くような情報が少ないため、江戸期の古典の紹介第2弾をお送りします。

『鍼灸抜粋大成』と未決定16穴

読者の皆様のなかには本郷正豊の『鍼灸重宝記』（医道の日本社）を読んだ方もおられることでしょうか。江戸時代より鍼灸入門ハンドブックとして有名で、広く世の中に普及したものです。しかし、筆者は重宝記の原点であり、時代も古い『鍼灸抜粋大成』（『針灸典籍大系』15、

出版科学研究所）を重要視しているのです。残念ながら『抜粋大成』は、活字になっていないために利用される機会に恵まれていません。

本書は、岡本一抱（1654～1716）により、全3巻7冊として、元禄11（1698）年自序、翌年（1699）刊行されたものです。上之上、上之下は概論・診察（九針の図、寸関尺、祖脈、撚鍼の手法、打鍼の手法、管鍼の手法、鍼灸の禁忌など）。中之上、中之中、中之下は経穴編。下之上、下之下は治療編です。経穴のまとめ方は、経脈別ではなく、部位別にまとめられています。

本稿では、非合意16穴の中からいくつか紹介してみます。

まず、中国が瞳孔線上にこだわっている巨膠穴の記載についてです。

○巨膠 二穴、直ニ四白ノ下、鼻孔ノ傍八分ニアリ。蹠脈・足ノ陽明（胃経）ノ会。『銅人』ニ鍼三分、氣ヲエテ即チ瀉ス、灸七壯。『明下』ニ灸七七壯。病治、唇頬腫痛ミ、目盲シテミガタク、ハクマクドウシ 箔膜瞳子ヲ覆ヒ、脚氣膝腫ルヲ主ドル。

次の水溝穴は、「人中溝の真ん中」と「上1/3」との違いで合意できていません。

○水溝 一穴「一名ハ人中」、鼻柱ノ尖ノ直ニ下ニアリ。『素』注ニ鍼三分留ル事六呼、灸三壯。『銅人』ニ鍼四分留ル事五呼、氣ヲエテ瀉ス。『明堂』ニ灸三壯ヨリ二百壯ニ至ル。病治、

